

中世成立期の安房国

—源頼朝上陸の背景—

野 口 実

はじめに

鎌倉時代の仏教の特徴として地方出身の僧たちの活躍を指摘することが出来る。さらに親鸞や忍性・叡尊のように、畿内出身でありながら長く東国に居住する者もあらわれる。従来、そうした現象の背景は鎌倉幕府の成立や宗教者自身による辺境の民衆救済の意志といった視角から説明されてきたが、中世成立期（撰関・院政期）における東国の文化状況に関する近年の研究成果は、武士の在京活動など、当該期の都鄙間交流の状況を明らかにし、そこには、中央仏教界から疎外されたり、更なる勉学を求める僧たちにとって主体的な活動の場が用意されていたことを示している。

たとえば、親鸞が長く常陸国笠間を生活の場としたのは、彼の文化的あるいは宗教的な営為を満たすだけの物的・人的環境がそこにあつたからであるという見通しを、私は宇都宮（八田）氏の京都権門との関係や常陸平氏の本拠地付近の文化環境に関する研究成果から得ている。⁽¹⁾したがって、鎌倉時代に坂東から渡来（二元）僧や新たな宗

派を生み出すような僧が出現する理由を説明するのには、その前段となる時代における東国諸地域の文化環境について具体的な考察を進める必要を指摘せざるを得ないのである。³⁾

これまで、私は武士団研究との関わりで下野・下総・常陸などの文化環境について考察してきたが、本稿では目を転じて、三方を海に囲まれた小国安房に焦点を当ててみたい、当国はいわゆる「鎌倉仏教」の立役者の一人である日蓮を生んだ地である。京都女子大学宗教・文化研究所における平成二七年度の共同研究のテーマとした「鎌倉仏教と地方武士に関する総合的研究」のフィールドとするにはもつとも相応しい国であるのかも知れない。まずは、この国の中世前期における政治・文化状況を中央との関係から考察していきたい。

一 古代安房国の行政区画と国力

『和名類聚抄』に見える安房国の郡・郷は以下のとおりである。

平群郡	砥河(とがわ)	余戸	達良(たたら)	石井(いはい)	狭隈(さくま)
	長門(ながと)	大里(おほさと)	穂田(ほた)	川上(かはかみ)	
	駅家	白浜(しらはま)			
安房郡	太田(おほた)	塩海(しほみ)	麻原(をはら)	大井(おほい)	
	河曲(わはわ)	白浜(しらはま)	神戸(かむべ)	神余(かむのあまり)	
朝夷郡	御原(みはら)	新田(にふた)	大瀧(おほぬま)	満禄(まろ)	
	健田(たけた)				

長狭郡 壬生（にぶ） 日置（へき） 田原（たはら） 酒井（さかい）

伴部（ともべ） 賀茂（かも） 丈部（はせつかべ） 置津（おきつ）

安房国は養老二年（七一八）、上総国南部の四郡が分割されて成立した。天平十二年（七四一）再び上総国に合併されたが、天平宝字元年（七五七）にあらためて分立して近代に至っている。『古語拾遺』に阿波の齊部が海路移住して住んだところを安房としたことが記されているように、三方を海に囲まれた小国安房は、「海の道」によって中央の権力と結ばれていたたのである。陸地の面積の狭い安房が独立した国となったのは海上交通の要地であることと豊富な海産物に恵まれたこと^①にあった。

『延喜式』（巻第二十八 兵部省）によると、安房国の健児の数は三十で、上総の三分の一、下総の五分の一に過ぎず、また毎年造るべき武器も、甲が二領、横刀四口、弓十二張、征箭十二具、胡籥（やなぐい）十二具と少ないが、馬牛牧では上総が馬牧・牛牧各一、下総が馬四、牛牧一であるのに対して、安房には白浜・鈔師の馬牧があった。

二 流刑地としての安房国

古代の安房国は小国ながら産業・交通の面で相対的に大きな機能を有したことが看取できるが、さらに特徴的なのは伊豆・常陸とともに重犯罪者の東国における流刑地であったことである（『拾芥抄』巻下 第十八 赦令部）。

院政期以降でも、寛治二年（二〇八八）に大宰府目代をつとめていた肥後前司源時綱が宇佐八幡宮の神輿を射た罪で安房に配流（『中右記』同年十一月三十日条）。康和五年（一一〇三）には伊勢離宮院に放火・落書を行った

罪で伊勢大神宮の前禰宜荒木田宣綱が伊豆に配流された時、その従者で実行犯と目される大中臣末武も安房に流されている（『本朝世紀』同年八月十三日条）。天永二年（一一一一）には石清水の都維那賢祐を射殺した罪で、その同僚であった円秀法師が（『平戸記』寛元二年十月十四日条）、仁平元年（一一五二）には右兵衛尉中原遠章が殺人罪で（『本朝世紀』同年十一月二日条、保元の乱（一一五六）に際しては僧範長が謀叛の罪で（『兵範記』同年八月三日条）、また治承二年（一一七八）には当国に流されていた周防国住人多々良忠遠が召喚されたことが知られる（『玉葉』同年十月八日条）。そして治承三年（一一七九）には伊勢大神宮の訴えによつて筑前国博多にある住吉社の神官佐伯昌守が安房に流されている（『玉葉』同年五月三日条）。このとき、昌守とともに同社神官の昌助と昌家が伊豆・隠岐に配されているが、『吾妻鏡』によると、翌四年の段階では昌助・昌守とともに伊豆にいらしく、彼らを扶持するために下向してきたと思われる住吉小大夫昌長（昌助の弟）は、反平家の挙兵に起ち上がった源頼朝の門下に祇候していたという。おそらく、彼らの流刑の原因は対外交易をめぐる反平家的行動にあったのであろう。

ここで注目されるのは安房と伊豆の関係である。『吾妻鏡』には、佐伯昌守は治承二年正月三日、昌助は翌年五月三日に伊豆に流されたとあるが、先述のように『玉葉』によれば昌守の配所は安房であった。昌守は五月になつてから、あらためて伊豆に流されることになつたものか、あるいは流人の身でありながら安房と伊豆を自由に移動していたものとみられる。ちなみに、当時の安房と伊豆は海の道を通じて極めて親近な関係にあつたようである。

三 安房と伊豆

永久二年（一一一四）五月、檢非違使別当であった中御門（藤原）宗忠は、左兵衛尉源行遠の郎等を殺害した安房国住人公政を、彼を郎等としていた源為義に命じて召喚しようとしたが、為義は公政には安房に季則という本主がいると称したり、公政はよく伊豆にいることがあるので、ここから上洛するだろうと言って彼を引き渡そうとしなかった。この頃、公政は旧主である檢非違使尉の源重時への負物の弁済をのがれて、源為義の庇護を頼る立場にあったという（『中右記』永久二年五月十六・十七・二十八・三十日条）。このことから、当時の主従関係が多元的でフレキシブルなものであったことが知られるのだが、ここで注目したいのは公政が伊豆国とも関係をもっていたという事実である。彼は「度々在伊豆」（三十日条）というから、このころすでに伊豆―大島―安房を中継点とする畿内と陸奥を結ぶ太平洋の航路が開かれており、為義が公政の引き渡しを拒んだ背景には、当時源氏がその海のルート⁶の掌握に意を用いていたからなのではなからうか。『吾妻鏡』（治承四年九月十一日条）に源頼義が前九年合戦の功績で安房国に所領を与えられ、これを伝領した義朝が頼朝の藏人任官を祈るため伊勢神宮に寄進して丸御厨が成立したことが特筆されているのは、ここが頼義以後、源氏が奥羽や北坂東に進出するための拠点としての役割を果たしたからではないかと考えられるのである。

戦国時代、伊豆と安房が伊豆大島を介する形で密接な繋がりを有していたことについてはすでに滝川恒昭氏の指摘がある⁶。海路を利用して西国と坂東を往復するには、伊勢方面から内海（現、東京湾）に入ってここに流入している河川を遡って内陸に至るルートがあるが、陸奥や関東の太平洋側の地域に向かう場合は、伊豆から大島を経て

安房に渡り、上総の東海岸に出たのではないかというのである。滝川氏は、『太平記』に安房国一宮安房神社の外港的役割を果たし、東国海上交通のキーステーション伊豆大島と対峙する位置に所在した「女良の湊」が所見することや野島崎に源頼朝が上陸したという説が存在することを傍証として挙げておられるが、これはまさに、中世前期から伊豆と安房が海を通じて密接な関係にあったことを示すものである。伊豆と安房が海路で結ばれていたことは『二中歴』に収められている日本図からも確認でき、鎌倉時代に東条御厨の地頭であった工藤氏が伊豆の出身であることも想起されるのである。⁽⁸⁾

四 安房守の赴任・離任のコース

時代は逆行するが、海上交通と安房に関して思い起こされるのは平忠常の乱に際し、政府が安房守に伊勢平氏の平正輔を補任したという事実である。⁽⁹⁾この乱に貞盛流平氏と良文流平氏の私戦的側面が認められ、政府が貞盛流による忠常追討という方策をとったことは夙に指摘したところであるが、その際、正輔が安房下向にあたって毎国二十艘の船と不動米穀毎国五百石を政府に申請していることは注目に値する（『小右記』長元三年五月十四日条）。正輔は海路を安房に向かい、海上から忠常を攻撃しようとしたのであろう。

しかし、安房守の海路による赴任は特別な事ではなかったようである。摂津住吉大社の神主であった津守国基は、応徳二年（一〇八五）に安房守に補されて赴任していた子息の宣基を訪ねて安房に下ったと思われるが、その帰途の様子を自らの歌の詞書にのこしている（『津守国基集』）。そこには「あはの国よりかみの、道からまかり上りに駿河の入江の浦といふ所にて風ふきて八日まで舟を出さず」とあって、安房から相模ないしは伊豆を経て現在の

静岡市清水区の清水港に比定される入江の浦に至る海路の存在が想定可能である。¹⁰⁾ また、『後拾遺往生伝』や『元亨釈書』には、嘉保三年（一〇九六）に安房守に任じた源親元について、仏教にたいする信仰心の厚い彼が在任中に善政を敷いたので庶民からも慕われて、離任に際して柏崎浦から乗船した際に、直衣の袖を解いて名残を惜しむ人たちに遣わしたという逸話が伝えられている。ちなみに、柏崎浦は現在の館山市沼に比定され、この地に所在する国司神社は源親元を祀っている。¹¹⁾

五 院政期の受領・知行国主

すでに指摘されているように、十二世紀以降の安房国は女院や院近臣の知行下におかれた期間が長い。¹²⁾ まず、保延二年（一一三六）から天養元年（一一四四）の二期にわたって安房守をつとめた藤原親忠は鳥羽法皇の皇后であった美福門院（藤原得子）の乳母父であり、当時安房国が美福門院の分国であったことが想定される。また、承安四年（一一七四）から治承四年（一一八〇）の間、知行国主であったことの確認出来る吉田（藤原）経房は後白河院の近臣であり、後述するように源頼朝や北条時政とも由縁の人物であった。彼は保元三年（一一五八）、平義範との相博によって伊豆守から安房守に遷任して長寛二年（一一六四）まで、その後も猶子の有経が仁安三年（一一六八）まで、続いて実子の定経が安元二年（一一七六）まで、さらにその兄弟の定長が養和元年（一一八一）まで、それぞれ安房守を重任したことが知られる。平義範も経房の義理の兄弟（定経の叔父）であったから（『吉記』承安四年九月十五日条）十二世紀後半の安房国はほとんど吉田経房の知行下に置かれていたと見ることが出来るのである。¹³⁾

11～12世紀の安房守

氏名	所見年月日	補任など	出典・備考
藤原 実輔 (姓欠) 秀俊	長徳 2 (996) 1.25	補任	長徳二年大間書
	寛弘 1 (1004) 3.7 3.22	見任 見任	権記 御堂関白記
大江 時棟	長和 1 (1012) 1.27	補任	外記補任 (寛弘 5 年)
	長和 4 (1015)	見任	本朝統文粹
滋野 善言	長和 5 (1016) 1.12	補任	外記補任 (寛弘 6 年)
藤原 基房	長元 2 (1029) 1.24	補任	公卿補任 (同年藤原朝経項)
藤原 光業	長元 3 (1030) 3.27	見任	日本紀略
平 正輔 (姓欠) 真重	長元 3 (1030) 3.29	補任	日本紀略
	長元 4 (1031) 閏10.27	見任	左経記
菅野 成時	長久 1 (1040) 4.13	見任	春記
津守 宣基	永保 1 (1081) 10.11	補任	水左記 帥記 為房卿記
藤原 孝友 紀 宗政	応徳 2 (1085)	補任	魚魯愚抄
	寛治 6 (1092) 1.25 11	補任 補任	為房卿記 系図纂要
伴 広親	嘉保 2 (1095) 1	補任	朝野群載 第二十二
源 親元	永長 1 (1096) 1.23	補任	中右記 元檢非違使
惟宗 基親	康和 1 (1099) 1.23	補任	本朝世紀
惟宗 基重	康和 5 (1103) 2.30	補任	本朝世紀
藤原 宗政	嘉祥 1 (1106)	補任	魚魯愚抄
	嘉祥 2 (1107) 5	没	中右記 (5.13条)
藤原 師国 (姓欠) 範季	天仁 1 (1108) 1.24	補任	中右記
	天永 2 (1111) 1.21	辞任	中右記
(姓欠) 宣行	天永 2 (1111) 1.23	補任	中右記
	元永 2 (1119) 1.24	補任	中右記
平 宗房	元永 2 (1119) 7.30	補任	中右記
伴 広親	保安 2 (1121) 春	補任	除目大成抄
藤原 隆仲	天治 2 (1125) 3.28	補任	二中歴
藤原 齊章	保延 1 (1135) 3.14	補任	中右記
藤原 親忠	保延 2 (1136) 11.4	補任	中右記
	康治 2 (1143) 4.3	見任	本朝世紀 諸院宮御移徙部類記
高階 泰基 (姓名欠)	久安 1 (1145) 閏10.23	見任	清原重憲記
	久安 5 (1149) 4.3	重任	本朝世紀 高階泰基?
高階 泰基	仁平 1 (1151) 8.11	見任	台記別記
平 義範	仁平 2 (1152) 12.30	補任	兵範記
	久寿 2 (1155) 2.29	見任	為親記
	保元 3 (1158) 11.26	遷任	保元三年大間書 公卿補任 (養和元年藤原経房項) 任伊豆守
藤原 経房	保元 3 (1158) 11.26	補任	兵範記 保元三年大間書 公卿補任 (養和元年藤原経房項) 元伊豆守
	長寛 2 (1164) 2.28	辞任	公卿補任 (養和元年)
藤原 有経	長寛 2 (1164) 2.28	補任	公卿補任 (養和元年 藤原経房項)
藤原 定経	仁安 3 (1168) 1.11	補任	山槐記除目部類 兵範記 公卿補任 (建久八年)
	安元 2 (1176) 2.5	遷任	公卿補任 (建久八年) 任美濃守
藤原 定長	安元 2 (1176) 1.30	補任	公卿補任 (文治五年)
	治承 4 (1180) 1.28	重任	玉葉 公卿補任 (文治五年)
藤原 経房	養和 1 (1181) 12.1	見任	定長卿記
	治承 4 (1180) 10.7 養和 1 (1181) 3.27		山槐記 <知行国主> 玉葉

六 吉田経房知行下の安房国

院政期の安房国に関する史料の中で注目されるのは、吉田経房の日記『吉記』の承安四年（一一七四）三月十一日条に収められている同月七日付「左近衛府牒」である。その冒頭部のみ引用しておこう（高橋秀樹編『新訂 吉記』による）。

左近府牒 安房国衛

应被早任先例、催進旧貢相撲人子息、兼又撰貢膂力新点白丁輩等状、

旧貢、

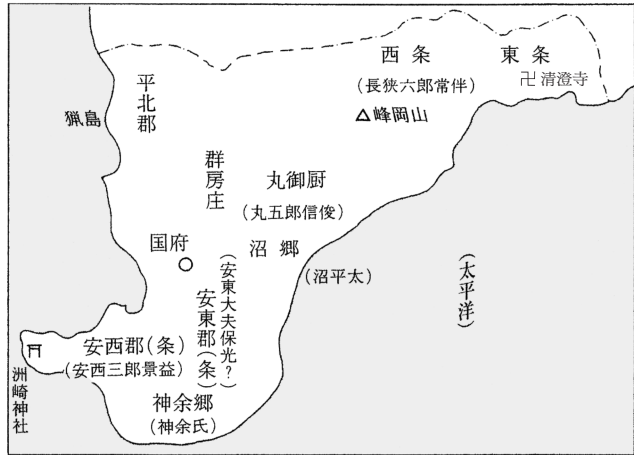
御厩案介（主）師景同男、安重（東）大夫保光 介大夫 政所大夫弘澄

（以下略）

この文書は、左近衛府が朝廷の節会相撲に参加する相撲人の「催進」を安房国衛に命じたものであるが、ここに所見する御厩案主師景・案主大夫保光・介大夫・政所大夫弘澄は、安房の在庁官人で、在地武士とみられる存在である。

保元の乱で安房国の武士は源義朝に従っており、半井本『保元物語』には安西・金摩利・沼ノ平太・丸ノ太郎の名が見える。「左近衛府牒」に該当する人名は見当たらないが、安西氏が代々「景」を諱（実名）の通字にしているから、師景がこれに比定出来るかも知れない。

平治の乱で東国武士団の棟梁（紛争調停者）であった源義朝が滅びたことは、在地に大きな変動をもたらした。



12世紀末期の安房国

ちなみに、長狭氏が平家と関係を結んだことを直接物語る史料は見出せないが、長狭郡に所在する清澄寺に、京都六波羅蜜寺出土の三鈷杵文平瓦と同范¹⁷と考えるほど瓦当文様の似る平瓦が伝存している事実は注目してよいであろう。長狭郡は安房国の北東部に所在して太平洋に面しているから、このことは房総半島東岸を北上する海上輸送ルート¹⁸の存在と機能を想起させるものがある。

当時の主従関係は「恩こそ主よ」といわれるように、双務的・契約的なものであり、乱後、かつての源氏家人たちも、全国の武士に対する軍事指揮権を掌握した平家に従ったのである。しかし、平家は、当時の地方武士たちが直面していた在地勢力同士や一族間で生じていた紛争を、対立する一方を引級し、それを従属度の強い家人に組織するというような方策によって解決しようとしたために、かえって在地社会が不安定となる状況がみられた。¹⁵

安房国においても、かつて義朝に従属した形跡が見えなかった長狭氏が平家と結んで台頭し、これに三浦半島から浦賀水道の制海権を掌握して安房国西部にも勢力をのばしていた三浦氏が衝突するに至ったよう¹⁶で、長寛元年（一一六三）秋、三浦義明の嫡子楳本太郎義宗が長狭六郎常伴を安房国長狭城（千葉県鴨川市）を攻めた時にうけた傷がもとで死亡したという話が『延慶本平家物語』（第二末）などに伝えられている。

この時期、中央政界の状況をみると応保二年（一一六二）に後白河院の院政が停止され、二条天皇の親政が確立しており、三浦氏の行動はこうした変動を背景にした可能性が強い。平清盛は政治的には天皇に、経済的には院にも奉仕をする姿勢を示していたから、この事件は問題視されることもなく、長狭氏の勢力伸張は知行国主吉田経房も容認するところであったと考えられる。

七 源頼朝の挙兵と安房国

治承四年（一一八〇）、伊豆に挙兵した源頼朝は、石橋山合戦で大敗を喫した後、真鶴崎から安房に渡海して再起を果たした。このことについて、通説的な理解では『吾妻鏡』の筆致に従って、鎌倉に進軍するはずであった頼朝が、敗戦に対応する形で急遽安房への撤退を決定したかのように受けとられている。しかし、頼朝に呼応して相模国衣笠城に籠もった三浦氏の一党も安房を目指したこと。また、この時期の事実関係について『吾妻鏡』よりも信頼性の高い記述の存在することが指摘されている延慶本など『平家物語』の読み本系諸本には、安房の在地武士である丸信俊や安西明益（明景）が、山木夜討ちあるいは石橋山合戦で頼朝軍に属したことが見えており、すでに、安房の一部が頼朝の勢力圏に属していたことが想定されるからである。三浦氏も安房西部に勢力を及ぼしていたから、在地諸勢力の帰趨の状況を考えると、頼朝の安房への渡海は当初より計画されていたもののように思われるのである。その傍証となるのが、前述した安房と伊豆の密接な関係である。

さらに、注目すべき点は、この時の安房の知行国主が、伊豆を長く知行していた吉田経房であったことである。すでに指摘されているように、経房は頼朝が少年時代に皇后宮や上西門院庁に祇候していた際の上司であり、直接

的な関係を有する存在であった。しかも、彼が伊豆守であったとき、当国の在庁である北条時政とも関係をもっていたことが知られている。⁽²⁰⁾そして彼は頼朝に反平家の挙兵を促した後白河院の近臣であった。⁽²¹⁾危うい人脈論になつてしまふが、敢えて述べるならば、経房は源頼朝と北条時政と情報を交換しつつ、頼朝の挙兵と安房上陸に対して看過ないしは容認する立場をとつたのではないだろうか。

「在地のことは在地で」というのが下部構造を重視する戦後歴史学の方法論である。しかし、夙に西岡虎之助氏が『莊園史の研究』の中で、中央における摂関家の政争が地方的現象となつて現れていることを指摘されているように、⁽²²⁾在地の紛争について考察する場合、中央の政局や人間関係に対する理解と、官制や身分秩序などに関する知識が要求されるのである。そのような観点から、頼朝の挙兵についても、当時相模国目代であつた中原清業が、木曾義仲の上洛を機に鎌倉に下り、鎌倉政権と王朝政府の橋渡し役を果たした平頼盛の家人であつたことなど、『吾妻鏡』史観によつて塗り固められた源頼朝による鎌倉政権草創のストーリーとは異なる脈絡で理解する糸口が見いだされつつある。⁽²³⁾頼朝の安房渡海もそうした観点から再検討されることになるだろう。

そのような視点で『吾妻鏡』における頼朝の安房上陸前後の記事を再検討してみると、頼朝の安房上陸は石橋山敗戦による逃走としてではなく、当初より計画されていたものと見た方がよいように思われる。衣笠合戦に敗れた三浦氏の一党も安房に渡海し、⁽²⁴⁾この機に乗じて宿敵である長狭氏を滅ぼしている。『吾妻鏡』は、平家に心を寄せ、長狭常伴が頼朝の宿館を襲おうとしたことを察知した三浦義澄が先んじて長狭氏を攻撃したように記しているが、安房が長く吉田経房の知行下にあつたことや、安房の在地武士が挙兵当初から頼朝とともに行動していた可能性が高いこと、長狭氏が三浦氏と対立関係にあつたことなどを総合すると、長狭常伴の滅亡は三浦氏との私的関係による可能性が高いのである。翌年七月、常伴の郎等であつた左中太常澄が頼朝暗殺をはかろうとしたのも、頼朝に敵

意のなかった主人が三浦氏に討たれたのを見殺しにした恨みによるものと考えた方がよいように思われる。

頼朝が安房を再起の地と予定していたことは、その逗留の期間の長さからもうかがえるように思う。『吾妻鏡』によれば、安房国平北郡狹島に上陸した頼朝は、上総に向かうまでの二週間以上を安房に滞留している。すなわち、八月二十九日に北条時政等と合流した頼朝は、翌九月一日、上総広常のもとに向かう方針を固め、当国住人安西景益に「在庁」を催し、「京下之輩」を捕らえて参向するように命じ、三日には小山氏ら坂東の有力武士に参向を求める書状を遣わし、上総に向かった。ここで、長狭常伴の敵対を察知した三浦義澄が常伴を討ち、北上の危険を進言した景益の館に入ったとする。しかし、安房が院の近臣で頼朝や北条時政と関係の深い吉田経房の知行下であり、伊豆で挙兵した当初より安西・丸氏などの安房国の武士が頼朝に従っていたとするならば、長狭氏の敵対は三浦氏の行動を正当化するとともに、のちに誅殺される上総広常の去就の不明を強調するための曲筆と見ることが出来るであろう。⁽²⁵⁾ いずれにしても、その後、頼朝は安房に腰を据えて洲崎宮に参詣して神田を寄進したり、源氏ゆかりの丸御厨を巡見するなど余裕のある時間を過ごしている。ちなみに、洲崎宮への参詣は四部合戦状本『平家物語』や『源平盛衰記』にも記事が見える。

おわりに―中世前期における安房の文化的環境

これまで、源頼朝の挙兵成功において安房国の果たした役割が正当に評価されていなかったことを述べたが、この時代、下総に君臨した平家姻戚の留任貴族藤原親政が千田庄⁽²⁶⁾、坂東随一の武士団を率いた上総広常が玉崎庄と、ともに房総半島の太平洋側に本拠を置いていたことを想起するならば、安房の重要性をあらためて認識することが

できよう。

近世以降現代に至るまで、安房Ⅱ房総半島南端部は関東地方においてすら辺境視されてきたが、中世前期以前の時代において、安房は畿内から常陸・陸奥に連なる太平洋航路における坂東の入口だったのである。前九年合戦後に源頼義がのちの丸御厨を恩賞として与えられたこと、平忠常の乱に際して伊勢に本拠を有する平正輔が安房守として追討の一翼を担うことを期待されたこと、源為義が保護した公政なる者が伊豆と安房を頻繁に往き来していたこと、吉田経房が意的に伊豆と安房を自らの知行下に置こうとしていたことなどを総合すると、安房の重要性はさらに際立つことであろう。

滝川恒昭氏が指摘されたように、近世の地震による地形の変化も中世以前の安房に対する理解の妨げになっていることも確かである。²⁷⁾ 今後、伊豆半島・伊豆大島・房総半島東海岸、そして茨城県の太平洋岸の中世遺跡に対する発掘調査やこれらの地域に所在する寺院に伝えられた仏像や石造遺物に対する調査研究が進展すれば、この地域と畿内・西国との密接な交流がさらに明らかにされるのではないだろうか。

物流の往来は人と情報のネットワークを構築する。このことは安房国に中世仏教の担い手の一人となる日蓮が生まれ育つ条件を用意したこととして評価する必要があるだろう。彼が修行の場とした清澄寺に伝えられた六波羅蜜寺出土のものと文様が極似する平瓦は、京都と安房との間に育まれた仏教文化の交流の存在を物語る。親鸞が長く居住した常陸国笠間の地と同様に、²⁸⁾ この時代には「草深い坂東」においても、交通・流通の要地には個人の精神を鍛えるに足るほどの文化的空間が成立していたのである。

注

- (1) 須藤聡「平安末期清和源氏義国流の在京活動」(『群馬歴史民俗』第一六号、一九九五年三月)、川合康「内乱期の軍制と都の武士社会」(『日本史研究』第五〇一号、二〇〇四年五月)・「中世武士の移動の諸相―院政期武士社会のネットワークをめぐって―」(メトロポリタン史学会編『歴史のなかの移動とネットワーク』桜井書店、二〇〇七年二月)、長村祥知「後鳥羽院政期の在京武士と院権力―西面再考―」(上横手雅敬編『鎌倉時代の権力と制度』思文閣出版、二〇〇八年九月)・「在京を継続した東国武士」(高橋修編『実像の中世武士団 北関東のものふたち』高志書院、二〇一〇年八月)、岩田慎平「武士の成立と関東」(同)、拙稿「東国武士と京都」(同)、拙著『源氏と坂東武士』(吉川弘文館、二〇〇七年七月)、同『東国武士と京都』(同成社、二〇一五年一〇月)、拙稿「京都の中の鎌倉―空間構造と東国武士の活動―」(福田豊彦ほか編『鎌倉の時代』山川出版社、二〇一五年一月)など。
- (2) 拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」(拙著『東国武士と京都』初出は二〇一三年三月)・「宇都宮頼綱―京都で活動した東国武士―」(平雅行編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第三巻 公武権力の変容と仏教界』清文堂、二〇一四年七月)。
- (3) 拙稿「了行の周辺」(『東方学報』第七三冊、二〇〇一年三月)・「東国出身僧の在京活動と入宋・渡元―武士論の視点から―」(『鎌倉遺文研究』第二五号、二〇一〇年四月)・「鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動―了行・道源に関する訂正と補遺―」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二四号、二〇一一年三月)。
- (4) 石井進「海から見た安房」(『里見氏稲村城跡をみつめて』第四集、里見氏稲村城跡を保存する会、二〇〇〇年二月)。なお、その後の安房国の行政区画変化(中世的郡郷の成立)については、拙稿「鎌倉政権の成立と長狭氏」(拙著『中世東国武士団の研究』(高科書店、一九九四年一二月、初出は一九八〇年三月)を参照されたい。

- (5) 拙稿「流人の周辺」(拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年二月、初出は一九八九年四月)。
- (6) 滝川恒昭「戦国期の房総太平洋岸における湊・都市の研究―房総沖太平洋海運検討の前提として―」(『千葉史学』第三一号、一九九七年二月)。
- (7) 川尻秋生「海上交通」(『千葉県の歴史 通史編 古代2』千葉県、二〇〇一年三月、第二編第二章第四節)二四八ページ。
- (8) 東条御厨と同じ太平洋側に位置する上総国伊南庄の深堀氏も伊豆出身とする説が有力である(町田有弘「上総国御家人深堀氏について」『勝浦市史研究』第二号、一九九六年三月)。
- (9) 平忠常の乱については、拙稿「平忠常の乱の経過について―追討の私戦的側面―」(拙著『坂東武士団の成立と発展』弘生書林、一九八二年二月、再刊、戎光祥出版、二〇一三年一月、初出は一九七八年)、拙著『源氏と坂東武士』などを参照されたい。
- (10) 川尻秋生「海上交通」(『千葉県の歴史 通史編 古代2』第二編第二章第四節)二四七〜八ページ。
- (11) 『日本歴史地名大系第一二巻 千葉県の地名』(平凡社、一九九六年七月)一一九三ページ。
- (12) 川尻秋生「院政期の房総の国司」(『千葉県の歴史 通史編 古代2』第三編第五章第二節)八六八ページ以下。
- (13) 川尻秋生「院政期の房総の国司」、飯田悠紀子「知行国主・国司一覧(天養元年〜寿永2年)」(永原慶二ほか編『中世史ハンドブック』近藤出版社、一九七三年六月)、中込律子『坂東八箇国国司表』(埼玉県県民部県史編さん室、一九八七年一月)、菊池紳一・宮崎康充「国司一覧」(児玉幸多ほか監修『日本史総覧II 古代2・中世1』(新人物往来社、一九八四年一月)。
- (14) 拙稿「相撲人と武士」(中世東国史研究会編『中世東国史の研究』東京大学出版会、一九八八年二月)。

- (15) 拙著『源氏と坂東武士』・『武門源氏の血脈 為義から義経まで』（中央公論新社、二〇一二年一月）。
- (16) 拙稿「鎌倉政権の成立と長狭氏」。
- (17) 山路直充「清澄寺(軒瓦)」(千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料)第1章10、一九九八年三月。
- (18) 元木泰雄「平清盛と後白河院」(角川書店、二〇一二年三月)。
- (19) 長門本には「伊豆の国より兵衛佐に相隨ふ輩」として「丸信とし、安西四郎為景」、延慶本には「伊豆国より兵衛佐に相隨輩」として「丸五郎信俊、安西三郎明益」と見える。
- (20) 川尻秋生「平氏政権と房総」(千葉県の歴史 通史編 古代2)第三編第五章第四節、菊地紳一「房総三か国の国司について―鎌倉時代を中心に―」(千葉県史研究)第一号、二〇〇三年三月)、拙稿「北条時政の上洛」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二五号、二〇一二年三月)・『玉葉』(九条兼実)―東国武士への視線―(拙著『東国武士と京都』、初出は二〇一一年一月)。
- (21) 上横手雅敬「院政期の源氏」(御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館、一九八一年六月)、元木泰雄『河内源氏 頼朝を生んだ武士本流』(中央公論新社、二〇一一年九月)・「源頼朝」(拙編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第二卷 治承〜文治の内乱と鎌倉幕府の成立』清文堂出版、二〇一四年六月)。
- (22) 西岡虎之助「坂東八カ国における武士領荘園の発達」(『荘園史の研究 下巻一』岩波書店、一九五六年五月) 五八六・五九〇ページ。
- (23) 拙稿「北条時政の上洛」。
- (24) この合戦は『平家物語』の読み本系諸本は三浦義明の悲壮な最期を描いているが、『吾妻鏡』は合戦そのものの過程を詳しく描いてはおらず、さほどの激戦ではなかったようである。なお、早川厚一・佐伯真一・生形貴重『四部合戦状本平家』

物語註釈(八)』(一九九一年九月)を参照されたい。

(25) 『吾妻鏡』における上総広常の記述の虚構性については、拙稿「平家打倒に起ちあがった上総広常」(拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年二月、初出は一九九二年五月)を参照されたい。

(26) 藤原親政が千田庄を本拠とした背景としては、近世に干拓された樺海が中世前期には太平洋と接続したラグーン様の地形を構成し、港津として機能したことが想定される。また、十三世紀前半、上総氏の地位を継承した千葉常秀―秀胤(上総千葉氏)も太平洋に注ぐ一宮川河口近くの大柳館にいたことが明らかである。なお、拙稿「上総千葉氏について」(拙著『中世東国武士団の研究』初出は一九八四年)を参照されたい。

(27) 滝川恒昭「戦国期の房総太平洋沿岸における湊・都市の研究―房総沖太平洋海運検討の前提として―」。

(28) 笠間を取り巻く宇都宮氏の文化圏の形成過程については拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」(拙著『東国武士と京都』初出は二〇一三年三月)・同「宇都宮頼綱―京都で活動した東国武士」(平雅行編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第三巻 公武権力の変容と仏教界』清文堂出版、二〇一四年七月)を参照されたい。

(付記) 本稿は京都女子大学宗教・文化研究所における平成二七年度共同研究「鎌倉仏教と地方武士に関する総合的研究」

【研究代表者】野口実【研究協力者】岩田慎平・坂口太郎・畠山誠・山本みなみ)による研究成果の一部である。

＜キーワード＞

安房国 源頼朝 鎌倉仏教